

現代社会におけるエイジズムとジェンダー

小 松 秀 雄

1. 高齢化と少子化

1950年代後半からの高度経済成長によって日本の社会全体が大きく変貌し、その過程で多種多様な社会問題が顕在化してきた。高齢化と少子化は、そのような変貌のなかでも日本の将来を左右する重大な社会問題であり、1980年前後から〈少子・高齢化〉などの形でテーマ化され議論されるようになった。ここで参考までに、高齢化と少子化の推移について数字でたどってみよう。

まず、総人口に占める65歳以上の高齢者の割合を示す高齢化率は、次のように推移している¹⁾。約5% (1950年) → 7% (1975年) → 10% (1985年) → 14.5% (1995年) → 16.5% (1999年) → 25% (2015年の推定値)。国連の刊行物 (1956年)における区分では、人口の高齢化の程度を表す指標として高齢化率が使われており、〈若い人口〉 (高齢化率4%未満)、〈成熟した人口〉 (4～7%)、〈高齢化した人口〉 (7%以上)とされている。日本の人口は1975年頃から〈高齢化した人口〉になり、現在は世界最高水準の〈高齢化した人口〉に達している。言葉を換えれば、世界一の長寿国になり喜ばしいことではあるけれども、アジア・アフリカのいわゆる発展途上国の高齢化率がまだ5%以下の水準であることを考えると、日本の将来の行く末が気になる。なぜこれほどまでに急速に高齢化が進んできたのだろうか。

高度経済成長を背景とする公衆衛生と医学の技術の進歩、および衣食住の生活全体の改善などの恩恵を受けて長生きする人々が急増してきたことが、高齢

化の原動力ともいえるべき最大の要因である。同時に、合計特殊出生率（以後は出生率と略す）が多少の起伏を伴いながらも、やはり急激に低下してきたことも大きな要因として挙げざるをえない。出生率に関しても戦後の推移を取り出してみると、次のようになる²⁾。4.32（1949年、出生数270万人）→1950年代から60年代中頃までの急降下→1.58（ひのえうまの1966年、136万人）→1960年代後半から70年代前半の再上昇（第2次ベビーブーム）→2.14（ピーク1973年、209万人）→1970年代後半から再び低下→1.57（1990年）→1.38（1998年、120万人）。今や〈世界最低の出生率〉であり、〈世界最高の高齢化率〉と背中合わせになっている。総人口に占める高齢者（65歳以上）の比率と子ども（15歳未満）の比率を見ると、1995年頃にはほぼ等しかった（共に15%前後）のに対し、2015年には2.5（25%）対1（10%）になると予想されている。現在の人口を維持するための人口置換水準（出生率2.08程度）に基づいて計算すると、現在のような少子化の傾向が続けば日本の人口は2010年頃をピークに減少に転じて、2050年には1億人を下回り2100年には6500万人程度に落ち込むと推測される。

少子化の原因に関しては、いろいろな議論が続けられているが、それらの議論を整理すれば、戦後の民主主義と高度経済成長が日本の社会と価値体系を大幅に変えてしまい、「子どもを生みにくい状況」が作り出されてしまったということになるだろう。例えば、女性の社会進出と高学歴化は、「結婚に夢や希望を持たなくなった」、あるいは「育児に関する否定的情報が氾濫し女性は子どもに消極的になった」などの意図せざる結果をもたらしている³⁾。

高齢化と少子化は、人口統計学的に見ると日本の将来に上述のような暗い影を落としているが、アンバランスな比率で増え続ける高齢者に対しても重大な波紋を投げかけている。いわゆる高齢者差別（エイジズム ageism）の問題である。身分差別や障害者差別や女性差別と同じく、近代以前の日本の社会にも高齢者差別は存在していたけれども、65歳を超えて長生きする人々は少なく、反対に出生率が高かったために高齢化率が今よりも格段に低く（4%未満）、

社会問題化するまでには至らなかったと考えられる。さらに、高度経済成長の過程で業績主義や効率主義の価値観が強化され、高齢者差別を生み出す文化的仕組みが社会全体に拡大した点についても注目しなければならないだろう。

本稿では社会学の立場を中心にして、まず高齢者差別の〈先進国〉であるアメリカのエイジズム研究を概観し、エイジズム論の視点と枠組みを整理する。続いて、アメリカのエイジズム論と対照させながら、日本における高齢者差別の多種多様な研究を社会文化史的な視点から再検討する。さらに、そのような日本の内外のエイジズム論を通して、男女差別やジェンダーの問題に対する新しい取り組みへの手がかりを探ってみる。

2. アメリカにおけるエイジズム研究の概観

アメリカのエイジズムに関する本格的な研究は1960年代後半から始まり、医学、生物学、人類学、心理学、福祉学、政治学、法律学、経済学、社会学、歴史学、文学などの多種多様な分野において必ずしも連携した共同研究の方式ではないが、同時並行的に発展していく。すでに1940年代から実践されはじめていた老年学（gerontology）という名の学問的活動が中心となって、多種多様な科学は暗黙のうちに連携しながらエイジズム研究を進めてきたと考えられるかもしれない。そして、エイジズムの本格的な研究が始まってから約20年後の1987年にジョージ・マドックス他編『エイジング大事典』が刊行され、エイジズム論は一つの学問研究の領域として確立されたといえるだろう。この大事典では、エイジズムは次のように定義されている。

「エイジズムとは、まさに人種差別や男女差別が皮膚の色や性別によって行われるのと同様に、老人であるという理由によって、人びとを体系的に類型化し、差別することを指す。そこでは高齢者たちは頑固で古いぼれた考えや所作の持ち主、時代遅れの精神や技術の持ち主として枠づけられている。…… 高齢者を取り巻くこのような類型化や神話は、部分的には認識不足や広範囲な老人

たちとの不十分な接触によって説明される。しかしながら、そこにはもう一つの要因が働いている。年をとることへの深遠な恐れである。』⁴⁾

20年前後のいろいろな研究の蓄積を踏まえて、ほぼ過不足なくエイジズムが規定されている。この定義の項には、エイジズムの概念と用語を初めて導入した研究者としてロバート・バトラーの名前が挙げられているが、彼は主として老年医学の立場からエイジズム研究を実践してきた。エイジズム論の草分けともなったといわれるバトラーの論文「エイジズム：もう一つの頑固な形態」は1969年に刊行されている。その論文においてバトラーは、「われわれは、見過ごしがちで、いまだに頑固に変わろうとしない一形態である年齢差別ないしエイジズム、つまり他の年齢集団によるある年齢集団に対する偏見を、いまや非常に注視して考察しなければならない」⁵⁾と力説している。マルクスが十九世紀に資本主義社会における階級差別（階級搾取）を告発し研究してから、その他の差別の形態の中では人種差別と男女差別も、二十世紀の前半を通じて大きな社会問題として理論的にも実践的にも議論されてきた。それに比し、年齢差別は二十世紀後半になってようやく本格的に研究されるようになり、バトラーが1969年の論文で初めて学問的な概念規定を試みたといわれている。彼が高齢者差別に注目するようになったのは、1969年のワシントンでの事件を契機としてである。ワシントン特別区における高齢低所得者用の新興住宅の建設をめぐって、「老人には必要ない贅沢な施設だ」、「黒人高齢者が多数入居したら困る」などの理由で、地域の白人中年層と中間層が激しい反対運動を行った。バトラーは、人種差別や階級差別とも交差する形ではあるが、非高齢者層（中年層を中心とする）が高齢者を厳しく差別する姿を見出した。

バトラーは、1969年の論文以後も精力的にエイジズムの研究を続け、1975年には『老後はなぜ悲劇なのか?』という話題の本を出版し、そして1987年の『エイジング大事典』の作成の際にも多大の貢献をした。彼は一貫してエイジズムの否定的側面を鋭い視点で暴いており、例えば、エイジズムは、若者や中年の

人たちが抱いている「歳をとるにつれて心身の機能が低下し病気になる、無能力になる、汚くなる」などの不安を反映したものであり、一種の自己防衛のメカニズムであると捉えている⁶⁾。また、現実の社会における高齢者の悲惨な状況を明らかにしている。すなわち、アメリカの高齢者の多くが雇用や生活の場で差別され、貧しくて公共住宅にも入れなかったり、せっかくもらった高齢者の年金の大半は家賃と家の維持費に費やされてしまうという。

『エイジング大事典』の刊行後の1990年になると、これまでの多種多様なエイジズム研究を体系化する試みが現れる。それがアードマン・パルモアの『エイジズム』である。パルモアはバトラーとは異なり、主として社会学や人類学などの立場からエイジズムの多面性をもらさず把握しようとして、次のように定義している。

「エイジズムはある年齢グループに対する否定的、肯定的偏見ないし差別である。年齢グループに対する偏見は否定的なステレオタイプもしくはそのグループに対する否定的な態度である。年齢グループに対する差別とは、その年齢グループへの否定的対処である。」⁷⁾

パルモアによればエイジズムには、否定的偏見（ステレオタイプと態度）、否定的差別（個人的と機関的）、肯定的偏見（ステレオタイプと態度）、肯定的差別（個人的と機関的）などの諸形態が含まれているという。否定的偏見とは、高齢者に対する誤解や誇張された見方、ならびに否定的な感情であり、個人的なレベルと機関的（制度的）なレベルの否定的偏見が区別される。典型的な否定的見方として、九つの形態（病気、性的不能、醜さ、精神的衰退、精神病、無益、孤独、貧困、鬱）から高齢者を認識する立場があり、そこから高齢者を嫌悪したり、人生の最悪の年齢層と感じてしまうようになる。そして、「否定的偏見は表明しない限りは人を傷つけることはない。残念なことに、偏見は通常、差別に転化する。アメリカ社会では高齢者の差別は五つの制度にみられ

る。]⁸⁾ 雇用、政府機関、家族（高齢者の虐待など）、住宅、ヘルスケア（高齢者医療の不十分さ）の場において、否定的差別が偏在している。以上のような否定的エイジズムに関しては、バトラー以来の言説を継承しているのに対し、パルモアは肯定的エイジズムの諸形態を考慮すべき必要性を強調している。

「多くの人々が信じる肯定的ステレオタイプには少なくとも八つの主な形態がみられる。それは、高齢者は親切で、賢明で（知恵）、頼りになり、裕福で、政治力を持ち、自由で、永遠の若さを持ち、幸せであるとする八つである。]⁹⁾

「ほとんどの高齢者は若いときと同じ程度の人生の充足・幸福感を味わっている。仕事に関する心配の減少が健康もしくは経済的不安定への心配の増加に取って代わる傾向がみられる。さらに、子供に対する心配の減少が孫と義理の子供への心配の増加に取って代わる傾向がみられる。]¹⁰⁾

「高齢者への優遇差別は肯定的または否定的ステレオタイプに起因している。例えば、高齢者を賢明とみなす肯定的ステレオタイプを信じる人は、若い判事候補者よりも年配の候補者を選挙するかもしれない。…………… 高齢者への優遇差別は経済、政治、家族、住居、健康の五つの領域にみられる。]¹¹⁾

否定的エイジズムの言説からは惨めな高齢者のイメージと実態が浮かび上がってくるのに対し、肯定的エイジズムの言説から見ると、豊かで満ち足りた高齢者のイメージと優遇されている高齢者の実態が浮き彫りにされてくる。確かに否定的エイジズムは社会や文化や個人の意識に偏在しており、重大な問題を生みだしているとはいえ、アメリカにかぎらず肯定的エイジズムと呼ばれる諸形態も同様に少なからず存在している。日本を含む東アジアに見られるような敬老の文化が強い社会では、近代化が進み否定的エイジズムが広がっていく段階になっても、肯定的エイジズムは根強く残っている。パルモアのエイジズム論は現実の全体をほどよく捉えようとしており、エイジズムの比較社会学的研究を行う場合に貴重な枠組みとなるだろう。ただ、エイジズムを問題として

設定するかぎり、まず第一に高齢者差別という側面が解明されなければならない。

アメリカの多様なエイジズム研究の蓄積を踏まえながら、パルモアはエイジズムの概念を整理し規定した後に、エイジズムの原因と結果に関して幅広い観点から再検討し、将来に向けての実践的な方策も提唱している。近代社会の仕組みと価値体系が個人の自由と平等、競争と能率、活力と進歩などの観念を前面に押し出し、社会制度と個人の意識を構成したために、高齢者差別を助長する傾向が強まっていく。パルモアはアメリカ社会に流布しているユーモア、歌、文学などの言語表現の側面にも鋭い分析を加えており、「大半のユーモア、歌、芸術が否定的エイジズムを助長し …………… 文学とテレビは高齢者の様々なイメージを描いているが、以前には、肯定的イメージよりも否定的イメージが支配的だった」¹²⁾ と指摘している。近代社会の制度と文化のなかで育った個人は、あまり自覚せずに高齢者に対して否定的な言語表現を行いがちであり、否定的エイジズムを克服することは容易でない。今後は粘り強い、地道な、多種多様な実践的な取り組みが必要となるだろう。パルモアは、『エイジズム』の「第Ⅳ部 エイジズムの解消に向けて」において次のように述べている。

「人種差別と男女差別をなくしていくのに有効であった方法の多くはエイジズムについても有効である。それには以下のような個人的活動が含まれる。自分自身と他者に対して老化の事実を知らせる。エイジズムをあらわすような自身の行動をつつしむ。高齢者差別的な言葉やジョークを用いない、編集者や公務員に手紙を書いて訴えたりボイコット運動をおこし、エイジズムに反対する候補者に投票するようにする、などである。組織的行動には老化についての情報を収集し広めていく、エイジズムに反対する法案を支持していく、苦情を持ち込む、ボイコット、家賃不払い運動、監視活動、デモ、消極的抵抗運動と非暴力的対決、政治的キャンペーン、選挙民登録運動、市民共同の反抗運動などが含まれる。」¹³⁾

近代資本主義経済が核家族と男女役割分業（男性＝企業活動と女性＝家内活動）を重要な戦略的拠点にして発展し、個人の自由と平等のタテマエと裏腹に男女差別を助長してきたように、近代の業績主義の制度と価値観が高齢者差別を社会全体に広めてきたといえよう。とすれば、パルモアの提示している実践的な方策は、男女差別や高齢者差別を同時に解消していくような、近代社会の根幹を変革する戦略の上に設定されるべきだろう。

3. 日本の高齢者問題と女性の地位

—戦後の近代化の過程、ならびに棄老と敬老の文化をめぐって—

アメリカでは1960年代後半から、エイジズムと呼ばれる高齢者差別に関する学際的な研究が本格的に行われるようになったのに対し、日本では高齢者差別や高齢者問題はどのように扱われ研究されてきたのだろうか。ここでは、最初に社会学の立場から戦後の近代化の過程と高齢者問題の歴史を概観し、次に、主として民俗学が取り上げてきた日本の棄老と敬老の文化を再検討する。以上の二つの作業を通じて、欧米とは異なる社会文化的背景を手がかりにしながら、男女差別やジェンダーの問題にも考慮しつつ日本独自の高齢者問題の特徴を明らかにしてみたい。

(1) 戦後の日本の近代化と高齢者問題

第二次世界大戦の戦災のため終戦直後の1945年には日本の都市の多くは焼け野原となり、アジア随一の経済大国の力の大半は失われてしまったけれども、そこから復興への歩みが始まり、約半世紀余りに及ぶ驚異的な経済発展と激しい社会変容が進んだ。その過程で高齢者やジェンダーの問題は多種多様な姿で現れては、そのつど学問研究や政治社会運動の大きなテーマとなってきた。戦後の憲法と民法の下で婦人の参政権が認められ、日本固有の〈家制度〉から〈解放〉された女性たちは次第に社会の表舞台に登場する。もちろん、核家族化のために男女役割分業が戦前よりも明確になり、小さな家族内に専業主婦として

拘束されるといった紆余曲折を伴いつつも、政治、経済、教育などの領域で着実に〈男女平等に向けて進んで〉きたといえよう。現在の時点から振り返ると、戦後の近代化を通じて男女差別やジェンダーの問題に関しては確実にプラスの成果をあげているのに比し、高齢者問題の方はますます切実な社会問題になり、社会全体に重くのしかかってくるように思われる。

ところで、1963年に老人福祉法が成立＝施行され、1964年に「老人の日」（1966年から「敬老の日」）が制定され、高齢者の問題が社会的なテーマとして認知されるようになる。その背景には、1950年代からの高度経済成長の過程で一方では都市化と核家族化が進行し、他方では公衆衛生や食生活が改善されて高齢者が増加した結果、農村に〈取り残される高齢者〉の姿が目立つようになることがあった。都会に働きに出た人々は結婚してからも、両親や祖父母のいない核家族を作り、自分たちの独自のライフスタイルを楽しむようになる。高度経済成長の第一段階が終わる1960年代中頃は〈三ちゃん農業〉、〈家付き、カー付き、ばばぬき〉の言葉が広まった時期である。高齢者問題を研究する社会学を見ると、那須宗一『老人世代論』（1962年）、大道安次郎『老人社会学の展開』（1966年）などが刊行されている¹⁴⁾。老人問題という問題提起の仕方には、急速な経済成長の過程で農村や家に取り残されつつも過疎化した地域社会を支えている高齢者のイメージがつきまとしており、アメリカの否定的エイジズムに見られる厳しい高齢者差別とはいささか趣が異なっているように思われる。老人問題というまなざしは、1970年代にも受け継がれ、有吉佐和子『恍惚の人』（1972年）が出版されベストセラーとなり、本のタイトルが流行語ともなる。恍惚の人という言葉によって、取り残されながらも地域社会を支えている姿だけでなく、「使い古され使用できなくなった消耗品のような、社会にとってはやっかいな存在」という否定的なイメージが付加される。近代社会の業績主義や効率主義のまなざしから老人問題が照射されることによって、アメリカ的な否定的エイジズムの形態が社会全体に広がると同時に、日本の人口構成の変化が問題視されるようになる。70年代後半の『老人問題とは何か』にお

いて森幹郎は、儒教的な〈親孝行〉の倫理の衰退に還元せずに、近代社会の経済論理と人口構成の視点から老人問題を社会問題として位置づけ、いろいろな角度から老人問題について言及している。

「老人問題とはまず第一に、すぐれて社会問題である。経済社会の発展の過程で、人口の構造が老化し、人口の移動が起こり、家族機能のなかから弱者保護の機能が減退・欠落することによって、老人の経済扶養および介護扶養が社会化し、ついには、死すらも社会化して、ここに『老人問題』が発生したのである。…… この論理的仕組みがよくわからず、子供（夫婦）の親不孝が老人の問題を社会問題に押しやったのだと、倫理的に考えてしまうと、老人問題はいつまでたっても解決に近づかない。」¹⁵⁾

ここに至って日本社会の高齢化、あるいは高齢化社会の到来が、日本の将来を左右する重大な社会問題として議論されるスタイルが現れる。第1章で指摘した通り、高齢化率が1975年に7%を超え、1985年には10%に達している。国連の刊行物の区分によれば、日本の人口構成は〈高齢化した人口〉（7%以上）に該当し、自他共に認める高齢化社会といっても差し支えない。そのことを反映するかのように、吉田寿三郎『高齢化社会』（1981年）、三浦文夫他『高齢化社会への道』（1982年）などが刊行されている¹⁶⁾。1980年代の高齢化社会論では、老人の経済的扶養と介護扶養の問題が社会制度の側面から真剣に再検討されはじめて、高齢者の増大による社会的経済的圧力に対して年金制度や医療保険制度などの整備が叫ばれるようになる。

1970年頃までのような、目覚ましい高度経済成長の時代も終わり、安定成長の段階に達し、高齢者の人口が10%を超える高齢化社会（というよりも高齢社会）になると、〈取り残された〉とか、〈使い古された消耗品〉として高齢者を否定的に取り上げるだけでは社会全体が立ちゆかなくなるだろう。子どもから中年層までの非高齢者の肩に、増大する高齢者の社会的経済的圧力が重くのし

かかり、そのうち負担に耐えきれなくなる時代が来るかもしれない。そうならないためにも高齢者の健康と福祉を増進し、高齢者自身が社会の責務を積極的に遂行できるような社会の仕組みを考えなければならない。女性が社会の表舞台で活動できるときは社会がさらに豊かになる可能性があるように、高齢者の多くが社会から離脱せずに社会的責務を果たすときは、高齢社会の豊かな成果が期待できるだろう。アメリカのエイジズム研究における活動理論やプロダクティブ・エイジング論を、日本においても活用すべき時代が到来したといえよう。1990年頃から次のような戦略、プラン、出版物が現れる。「高齢者保健福祉推進10か年戦略（ゴールド・プラン）」（1989年12月始動）、「高齢者対策基本法」（1995年）、「新ゴールドプラン」と「エンゼルプラン」（1996年）、隅谷三喜男他監修『長寿社会総合講座』（全10巻、1993年）、『高齢社会白書』（1996～2001年）、浜口晴彦他編『現代エイジング辞典』（1996年）、『成熟と老いの社会学』（1997年）、辻正二『高齢者ラベリングの社会学』（2001年）など¹⁷⁾。最後の文献は、否定的エイジズムを再生産する〈非高齢者と高齢者の相互作用における否定的ラベリングの悪循環〉を実証的に明らかにした好著である。社会や文化や非高齢者による〈高齢者に対するスティグマ化〉、ならびにその呪縛にとらわれてしまう高齢者自身の〈自己スティグマ化〉のメカニズムがエイジズムの重要な論点であることを立証している。差別の社会学的枠組みとしてアーヴィン・ゴフマンやハワード・ベッカーたちの優れた研究の蓄積があるにもかかわらず、バトラーやパルモア等のエイジズム研究にはスティグマ論やラベリング論の視点があまり使われていないだけに、ラベリング論の本格的な実証的文献が刊行されたことによって今後のエイジズム研究は理論的にもグレードアップするだろう。

終戦から半世紀余り経過したが、バブル崩壊後の日本の経済は長い停滞期に入り、二十一世紀の初頭の現在では、もはやかつてのような経済成長が期待できないだけに、高齢者と女性が社会の様々な分野において年齢（世代）や性別の隔たりを越えて積極的に活動しなければ、高齢社会を豊かなものにするこ

はできないだろう。

(2) 日本における棄老と敬老の文化

前述の(1)において、日本の戦後の近代化の過程で顕在化してきた高齢者問題の変遷をたどってみたが、1970年代までは日本固有の老人問題のテーマも見られたとはいえ、80年代からはアメリカのエイジズムと対応するような高齢者差別の問題化と議論の仕方が登場してきた。だが、いぜんとして欧米のエイジズム論には還元できない日本固有の高齢者問題の側面があるのではなかろうか。二十一世紀には、より豊かな高齢社会の構築が展望されているが、それは日本の文化的社会的蓄積を踏まえたものでなければならぬだろう。そこで日本の棄老と敬老の文化について、民俗学の文献と筆者の地域社会調査の経験を手がかりにして考えてみよう。

さて、宮田登は1996年の『老人と子供の民俗学』において老人の問題を民俗学の立場から再検討している。他の学問分野のエイジズム論や高齢者論に刺激されて、改めて民俗学的老人論の掘り起こしを試みている感もあるが、他の分野には見られない、なかなか興味深い議論を展開している。まず、日本の伝説や昔話にもしばしば登場する「年老いた親を棄てる話」をめぐる議論を取り上げてみよう。柳田国男の「親棄山」(『村と学童』または『母の手毬歌』所収)を参考にしながら、宮田は棄老の四通りの話し方を検討しているが、整理すると次のようになる¹⁸⁾。

【棄老伝説1】：祖父と父と孫による「棄老」、祖父と孫、父の「親不孝」と孫の言葉(「祖父を運んできたもっこ、それを持ち帰り、いずれそれを使って次は父を運んでくる」)、父の反省と棄老の中止。これは日本固有の話ではなく、元は中国などの外国の話である。

【棄老伝説2】：年老いた父を隠す、難題が降りかかってきた自国の王様、難題を解決する老人の知恵、棄老を止めさせる。これも日本固有の話ではなく、元

は中国などの外国の話である。

【棄老伝説3】：長野県の姥捨山の伝説などに見られる、日本型に脚色された事例である。母子関係が表に出てくる、「姥棄て」になる、不憫な「年老いた母」を棄てない、「欲張りで意地悪な嫁」と「善良な年老いた姑」と「心根の優しい息子」。「嫁は姑を追い出そうと、亭主をそそのかし、いたしかたなく男は母親を背負って山へ置いて帰るが、里に戻っても母親のことを忘れることができない。そしてついに月夜の晩に老母を迎えに行くが、老母は日ごろより心がけの良い人だったので、山の神の加護をうけ幸運を得て、迎えにきた息子をも幸運に導いたという。一方、悪い女房は、……… ひどい難儀を受けて死んでしまった。」¹⁹⁾

【棄老伝説4】：これも日本固有の仕方に脚色された事例である。老母の知恵の大切さと慈愛が分かり、棄老を止める。「棄てられる母親が子に背負われて行く途中、道の木の小枝を折って行く。……… 息子が家に帰るとき道に迷わないようにと跡をつけていたというのである。……… 息子はその愛に感動して親を連れて帰り、末永く共に暮らしたという話しである。」²⁰⁾

棄老の伝説を読むと、いろいろな推測や問題提起ができるかもしれない。なぜ年老いた親を棄てなければならないのか。棄老の掟があるから、それに従ったままでのことであるといってしまうこともできるが、それならばなぜ年老いた親を棄てる掟があるのか。深沢七郎が話題の文学作品『楢山節考』（1956年）において〈冷たいまなざし〉で描き出したように、生産力の低い社会では、社会防衛のために、生産の担い手になりえない年老いた親を棄てるルールが作られたのだろうか²¹⁾。中国や日本などの東アジア地域では、棄老の対象は通常は60歳以上の者であり、いわゆる還暦の年齢になるようである。もちろん、『楢山節考』の老母おりんのように70歳になったために、息子辰平に背負われ雪の楢山に捨てられるケースもあり、60歳以上とはいいいながらも棄老の実際の年齢基準はまちまちであった。それはともかく、還暦は陰陽五行思想などの十干十二

支の考え方では人生の一つのサイクルが終わり、次のサイクルが新たに始まる節目とも見なされた。還暦を迎えた者は一つの人生サイクルを無事に終えたから、山＝自然に帰り、山＝自然の世界から社会を見守りながら再生を待っているのかもしれない。棄老の伝説のまなざしには、近代社会の業績主義や効率主義のような、自然を破壊する非人間的な拡大主義は含まれていないだろう。むしろ自然と共に生きる社会や人間が棄老の伝説を生み出し、支えているのではなかろうか。還暦を迎えた親を山＝自然に棄てる（帰してやる）ことは、社会防衛のためだけでなく、自然と共生する社会や人間の摂理であると見なされたのだろう。だが、いざ親を山に棄ててみると、とても忍びがたく棄てきれずに止めてしまう。親の知恵や技能の素晴らしさ、あるいは親の愛情の深さが息子や孫たちに伝わり、棄老の出来事は敬老の出来事に転換する。伝説はどこで完了するのか分からないが、年老いた親は息子に連れられて、再び村に帰り、素晴らしい知恵や技能、および深い愛情によって村の社会を守っていくことになるのだろうか。棄老の伝説は、生産力の低い社会において逆説的ながら高齢者の大切さを物語り、親不孝を戒め、敬老の精神を鼓舞するようである。

日本の棄老の伝説では、一般的に年老いた父親の代わりに母親が登場する。母性と母子関係の強い磁力が働き、父性と父子関係は退いてしまうようである。棄老の日本版からも推測されるように、日本の社会における女性の位置づけは微妙である。母性と母子関係がいろいろな領域や場面に現れるとはいえ、必ずしも女性の地位の強さや高さを物語るものではないように思われる。いわゆる民俗社会、ないしは民衆の世界において女性は時として男性よりも地位が高く力が強く、主導的な役割を果たしていたケースも見られたかもしれないけれども、全般的には反対のケースが多かったのではなかろうか²²⁾。それでは、公家や武家などの支配者の社会においては女性はどのような地位と力を保持していたのだろうか。公家の社会はともかくも、武家の社会では武士道が確立されるにつれ〈男尊女卑の規範〉が強化され、女性は男性に従い、家のために尽くす存在に固定化されていく。明治以後の近代化の過程で〈男尊女卑の武士道

的規範〉は、学校教育と家庭のしつけを通じて国民全体に浸透し、民衆の世界でも少なくともタテマエでは女性は家と親と夫に従うこととされた。そのような二重三重の社会的重石〉から女性がある程度解放されるのは、既述の戦後の近代化の過程における紆余曲折を経過した後である。もちろん、いまだに解放が完了したわけではなく、取り払うべき重石はいくつか残されている。

ところで、日本の政治や経済や学問の世界、さらに地域社会などを眺めると、現在でも長老のような存在が幅を利かせている。棄老と否定的エイジズムの物語とはそぐわない風景のように見える。恐らく今の長老とは異なり、かつての長老には正真正銘の権威が備わっており、人々は心から敬っていたものと考えられる。宮田登は『老人と子供の民俗学』において宮座と年齢階梯制の事例を取り上げ、民俗社会のなかでの老人のあり方を考察している。宮田の議論は民俗学や文化人類学や歴史学の多様な研究の蓄積を踏まえたものであり、民俗社会における老人の伝承知と経験知に光を当てている。伊勢湾の神島の当屋制度を事例にして、60歳（還暦）前後の人々が担う宮持（みやもち）＝当屋の役割や地位の重要性が論述されており、共同体の神聖な行事を主催する役割を無事に遂行することを通じて、宮持の老人たちは共同体の管理者＝守護者としての権威を獲得する²³⁾。子供から若者、さらに壮年から老年へとステップアップ方式で地位＝役割が構築されている年齢階梯制のなかで、宮持＝当屋は最終段階の最高位への入り口に立っており、無事に役目を務めることによって文字通り長老の仲間に入ることができる。そこでは、長老は豊かな実践的な知恵と技能を体得した〈まれ人〉であり、共同体のメンバーの〈崇敬的〉になる。長老の権威は、共同体に伝承されている知恵と技能の大半を体得したことに依拠し、集合的な尊敬や正当性と一体化している。単に年長であるとか、高齢まで長生きしているだけでは長老とは呼べないし、権威を保持することもできない。

長老の地位＝役割、ないしは権威が成り立つ社会文化的基盤は、ある意味では自然と共生するような民俗社会にあり、そこでは生活様式の変化が緩慢であ

り、生活経験を通じて伝承される知恵や技能が重要視される。近代資本主義社会の目まぐるしい変動のために生活の知恵や技能が使い物にならなくなり、〈時代遅れとか古臭い〉と評価されてしまうような状況が現れると、長老の正当な権威は成り立たなくなるだろう。そのときには、形骸化した長老の地位と役割が残され、軽蔑の対象となっていくかもしれない。まさに、否定的エイジズムの格好の標的となるだろう。宮座と年齢階梯制に関して注意すべき点を付け加えておくと、女性の地位と役割は全体として低く、還暦を迎えて長老の権威を獲得するケースは通常は見られない。自然と共生する民俗社会であっても、残念ながら男女差別が偏在しているといわざるをえない。武士道の規範が浸透したわけではないし、母子関係や母性が重要視されている風土を考えると不思議な感じではあるが。その点に関しては今後の研究課題としておく。

4. 男女平等の豊かな、そして幸福な老いをめざして

アメリカにおいて階級差別、障害者差別、人種差別、女性差別に続く第四ないしは第五の差別の研究として1960年代後半に本格的なエイジズム研究が始まってから、30年余り経過したが、日本でも1980年代からアメリカ的エイジズム論の影響を受けた高齢者差別の研究が行われるようになった。第3章で述べたように、1960年代から日本においても老人問題というテーマで実証的に議論されてきた。ただ、高度経済成長の繁栄の下で農村や家のなかに取り残された老人たち、あるいは都市の拡大の過程で都市の片隅に置き去りにされた老人たちが問題視されたとはいえ、厳しい業績主義と効率主義のまなざしから高齢者を差別するエイジズムを本格的にテーマ化するところまでは達していなかった。日本の女性差別研究やジェンダー論は1970年代から社会的に広がり始めるのに対し、高度経済成長がほぼ終息する、または戦後の日本の近代化が一段落する80年代に入って、欧米と同じエイジズム論に基づいて高齢者差別を研究するようになったといえよう。アメリカ型の近代社会になって同型の高齢者差別が拡大したために、差別研究としてのアメリカのエイジズム論が適用できるよ

うになったと考えられるかもしれない。

既述のように、アメリカのエイジズム論の集大成であるジョージ・マドックス他編『エイジング大事典』（1987年）が1990年に日本語に初めて訳されているが、90年代にはエイジズム研究の英語の本が次々と日本語に訳されると同時に、日本の研究者によるエイジズムの本格的な専門書も少しずつ出版されている。特に早稲田大学出版部からは『エイジング辞典』、『シリーズ高齢社会とエイジング』（全8巻）などが刊行されている²⁴⁾。また、1999年には日本民俗学会が企画した日本民俗学会満五〇年記念事業公開シンポジウム「〈老い〉—その豊かさを求めて—」が開催され、日本の民俗的風土の視点から高齢者問題を検討していく方針が提唱された。そのシンポジウムの成果として、日本民俗学会監修『老熟の力—豊かな〈老い〉を求めて—』（2000年）が刊行された。そこには、否定的エイジズムを乗り越えるために、高齢者の力の素晴らしさを再評価し、高齢者自らが社会のなかで積極的に活動できる場を広げようとする動きが見られる。

総人口の15%以上が65歳以上の高齢者となり、その比率は少子化のために今後は加速度的に増大していくと推測されているから、高齢者自身が心身を陶冶し社会的な責務を果たしていくことが期待される。それは、幸福な老い（successful aging）と名づけられる高齢者の一つの理想的なあり方である。

「老年期には、さまざまな心身あるいは社会環境の変化が訪れる。こうした変化に適応しながら、張りのある豊かな老年期を送ることは万人の望むところであろう。このような望ましい老後の生活状況を〈幸福な老い〉と呼ぶ。社会老年学では、〈幸福な老い〉は研究上の命題とされ、そのための条件や心のあり方が探求され、理論化されている。」²⁵⁾

「サクセスフルエイジング（successful aging）とは、年をとり心身ともに衰退していくのに委ねるのではなく、これを前向きに捉え、健康で、目標を持って活力を持って幸福に年を重ねていくことを意味し、次のように過ごすのが理想

的である。(紙幅の都合上、以下の文章を簡略化すると ①栄養について、②休養と睡眠、③日光、④良い姿勢と適度な運動、⑤快適さを保つ衣料、⑥身だしなみ、⑦清潔とリフレッシュ、⑧明るい心、⑨五感の活性化、⑩目標を持って生きる。)]²⁶⁾

幸福な老いとサクセスフルエイジングとはほぼ同じ意味の言葉であり、内外のエイジズム研究（老人問題の研究を含め）の蓄積から生まれた、高齢社会に適合する実践的な方策である。今後は、男女問わず、できるかぎり多くの者が幸福な老いを生きられるように努力しなければならない。男女差別をなくす努力と、男女共に幸福な老いを生きる努力とは切り離せない。近代の業績主義と効率主義が男女差別と高齢者差別を再生産する温床であるとすれば、男女の連帯（あるいは共生）と世代間の連帯（あるいは共生）の基盤となる社会の仕組みと価値観を構築していくべきであろう。

注

- 1) 浜口晴彦他編『現代エイジング辞典』（早稲田大学出版部、1996年）127頁。
- 2) 鈴木えりこ『超少子化』（集英社、2000年）「第一章 少子化の現状」を参照のこと。
- 3) 鈴木えりこ、同書、「第二章 少子化の原因」、ならびに清水浩昭『日本人口論』（日本放送出版協会、1998年）を参照のこと。
- 4) マドックス他編（エイジング大事典刊行委員会監訳）『エイジング大事典 [新装版]』（早稲田大学出版部、1997年）47～48頁。
- 5) Butler, Robert. 1969, Ageism: Another form of bigotry, Gerontologist 9, p. 245.
- 6) ロバート・バトラー（内菌耕三監訳）『老後はなぜ悲劇なのか?』（メヂカルフレンド社、1991年）の「第一章 アメリカの老人問題の悲劇」を参照のこと。
- 7) アードマン・パルモア（奥山正司他訳）『エイジズム』（法政大学出版局、1995年）19頁。
- 8) パルモア、同書、34頁。
- 9) パルモア、同書、37頁。
- 10) パルモア、同書、43頁。
- 11) パルモア、同書、45頁。

- 12) パルモア、同書、115頁。
- 13) パルモア、同書、238頁。
- 14) 那須宗一は、『老人世代論』（芦書房、1962年）においてマンハイムやオルテガの世代論を論述した後に、独自の老人世代論を提示している。また、大道安次郎は、『老人社会学の展開』（ミネルヴァ書房、1966年）においてアメリカのジェロントロジー（老年学）gerontology に言及しながら、老人社会学を構想している。時代背景が異なるとはいえ、40年ほど経過した現在から見ても、なかなか興味深い議論を展開している。
- 15) 森幹郎『老人問題とは何か』（ミネルヴァ書房、1978年）22～23頁。
- 16) 吉田寿三郎は1981年当時の日本老年学会理事であり、アメリカの老年学の研究を踏まえ、老年医学の立場から三つのイズム（レイシズム、セクシズム、エイジズム）に言及し、エイジズムの深刻さを指摘している。
- 17) 1990年代における高齢社会論では、高齢世代の自立と異なる世代間の連帯が提唱されている。それらに関しては、「忘年の交わり」を掲げている内閣府編『平成13年版高齢社会白書』（財務省印刷局、2001年）を参照のこと。
- 18) 柳田国男の小編「親棄山」は、『定本柳田國男集』（昭和45年）以前は単行書『村と学童』（朝日新聞社、昭和20年）や『母の手毬歌』（芝書店、昭和24年）に収められ、別々に刊行されていた。その辺の事情については、柳田国男『こどもの風土記・母の手毬歌』（岩波文庫、1976年）の付録と解説において詳述されている。
- 19) 宮田登『老人と子供の民俗学』（白水社、1996年）24頁、55～56頁、ならびに『定本柳田國男集 第二十一巻』（筑摩書房、昭和45年）301～302頁。
- 20) 宮田登、同書、24頁、56～57頁、ならびに柳田國男、同書、304～305頁。
- 21) 深沢七郎『榎山節考』（新潮文庫、1964年）は、1983年に今村昌平監督によって映画化され大きな反響を呼びおこしたが、どこことなく牧歌的な雰囲気漂う柳田国男の「親棄山」に比べると、はるかに厳しい〈非情のまなざし〉で日本の民俗社会と戦後の近代社会の現実を見つめているように思われる。
- 22) 宮田登『ヒメの民俗学』（筑摩書房、2000年）、および宮本常一『女の民俗誌』（岩波現代文庫、2001年）などを参照のこと。
- 23) 宮田登『老人と子供の民俗学』27～32頁。
- 24) 日本では早稲田大学出版部を中心に、エイジングの辞典・事典類などをはじめとする内外のエイジング関係の文献が刊行されているといっても過言ではない。
- 25) 浜口晴彦他編『現代エイジング辞典』122頁。
- 26) 浜口晴彦他編、同書、160頁。

Summary

Ageism and Gender in Modern Society

Komatsu Hideo

In Western nations and Japan, the population of the elderly has been increasing very rapidly, and on the other hand, the population of children has been gradually decreasing. The percentage of the aged population has amounted to about a fifth of the whole. Consequently, ageism has become an object of public concern. Ageism is listed as the fourth or fifth discrimination, following the other forms of discrimination such as racial and sexual discrimination. Older persons are often made a fool of and looked down upon for being “dirty, incapable, poor, or ill” by young people and non-older persons. These public issues, which fall under ageism, have been studied since the nineteen sixties in the United States of America. Students of ageism have maintained that not only ageism but also sexual discrimination have been produced and reproduced by capitalist economy and by the value system based on “achievement” in modern society.

This paper examines in the first place the history of theories of ageism in America in terms of sociology. Secondly, the relation between ageism and modernization in postwar Japan is investigated through comparative sociology and with theories of ageism. Ageism and sexual discrimination in Japan will be compared with that in America. Finally I intend to discuss the future of the world without such forms of discrimination as ageism and sexism, hoping that we will aim for “successful aging.”